

在特会の論理 (13)

——大学生時代から『正論』を読んでいたM氏の場合——

樋口直人

(徳島大学総合科学部)

Logics of *Zaitokukai* Activists (13)

The Case of Ms. M

HIGUCHI Naoto

University of Tokushima

1. 経緯

在特会の会員のほとんどは男性で、女性は少ない。ホームページによると、男性会員 10506 人、女性会員 1792 人であり、85%を男性が占める¹。もともと、極右支持層は男性が多いという知見は西欧で得られており (Gidengil et al. 2005: 1171; Givens 2005)、その意味で目新しい知見とはいえない。筆者も、現時点で実施した 33 名に対する聞き取りのうち、女性には 4 名しかインタビューできていない²。そのうちの 1 人が本稿で紹介する M 氏 (30 代女性) であり、以下では 2011 年 11 月 18 日に実施した聞き取り記録を再構成して彼女の経験をみていきたい。

2. 政治に対する関心、イデオロギー志向

(政治に対する関心はありましたか) はい。小学校高学年、中学生にかけてくらいですかね。よく図書館に通ってたんですよ。で、とにかく本を読むのが好きで、歴史の本——当然難しい本は読めないんですけど、ありきたりのところという小林よしの

りの漫画とか。とにかくいろんな本を読んだから、そこに引っかかったのが小林よしのりだったんですけど。その当時はインターネットとかあまりなかったんで。でも、関心というほどじゃないね、ただ本を読んだということですね。

雑誌もありますよね、『正論』とか、そういうのも読んでました。大学生の間だけだったと思います、購読してたのは。あとは目にとまった時にちょこちょこ。学校…バイトめっちゃくちゃやってたんで、本を読む時間というのは、移動時間だけですね。移動時間といっても、片道 2 時間かけてたんで。電車下りてバス乗って、バスまた乗り継いでっていうんで。だから、とにかく読むものがほしいんですよ。

北朝鮮の問題…ちょうど大学 (生) の時に拉致被害者が一部帰ってこない…。全部が全部ってわけじゃないんですけど、そういうことを議論する友達、先輩もいましたよ。あと先生も。ゼミが中心ですね。

(専門は) 英文学です。その頃はあんまりインターネットも使ってなかったし。今みたいに活発に在特会みたいなサイトもなかったんじゃないかな、と思うんですよ。見てないから記憶してないんですけど。とにかく、地元から大学に通ってたんで、本を読む時間というのは結構あったんですよ。暇つぶしも兼ねてですね。他の子だったらファッション誌とか見るのかもしれないんですけど。(どうして正論を

¹ 在特会ホームページより、2012 年 10 月 4 日閲覧 (<http://www.zaitokukai.info/modules/about/zai/membermap.html>)。

² このうち 1 人の女性については、樋口 (2012g) で紹介している。それ以外の活動家に対する聞き取り、彼ら彼女らが動員されるプロセスについては、樋口 (2012a, b, c, d, e) を参照。調査に際しての筆者の立場についても、これらの原稿で述べてある。

知ったのか) 拉致被害者が帰って来たという見出しに惹かれたのかもしれないです。

で、在日特権を許さない市民の会に入ってるんですけど、歴史の問題とかには興味持って問題も感じてたんですけど、でも在日問題ってあまり知らなかったんですよね、実は。薄々気づいてたのかもしれないんですけど、そこにあまり着目してなかったんですけど、やっぱり歴史の問題ですよ。ただその、在日韓国人が書いたような本も読んでましたし。小説家でもありますよね、在日の作家とか。

やっぱりインターネットが使えるようになって、何かしらの違和感はそれまで感じてたんですよ。マスコミとか、学校教育であるとか。学校で戦争の、そういう特別な授業があるじゃないですか。とにかく日本人は悪いことをした、しかも作文書かされたり。福沢諭吉は悪い人だとか、そういうどこの学校でも多分そうだったと思いますけど。人権教育とかそういうのはありましたし。そういう冊子とか、そういう本は必ず学校にありますし。

(選挙には) 毎回行ってます。必ず行ってます。どうして(選挙に行くのか) とか考えたこともないかもしれない。親が絶対行けっていうんですけど。大体地元が自民一色なんですよ。それで、親の付き合いとかでだいたい言うてくるんですけど。大体、他に入れられるところないんですよ。他に選択肢がないとか。共産と2人とか、そういうことが結構あったり。民主党は、あんまりないです、自分の地元では。

支持政党・・・それ難しいですよ。ここはダメ、ここはダメというのしかないから。政党という大きなくくりで言っても、結局その中の人を見ないと。でも、消極的な選択で自民党になるのかもしれないですね。まあ、他の有望な政党がもっと力をつけてきてというのであれば、また考えるんですけど。へんにばらけて(投票して) もって・・・。

3. 「外国人問題」への関心、在特会との出会い

ありますよ。韓国人・中国人とか小さい頃あんまわからないんですけど、フィリピン人とかめっちゃいました。歓楽街とか、そういうところに家があるんで。フィリピン人は多いですね。あとは大学行ったら韓国人とか、中国人の留学生いっぱいいますし。友達もいましたよ。

在特会に入るきっかけになったのが、フィリピン人のカルデロン一家、やっぱり「これはもうマスコミおかしいぞ」って思ってて。(一家のことはテレビで) やってました。なんかかわいそうって。「何がかわいそうだ、てめえ(と思った)」。テレビの報道はおかしいなと思ってたんで——その動画見つける前ですけど。周りの人間に聞いたんですよ、どう思いますかって。やっぱり薄々おかしいって思っている人、結構いるんですよ。で、自分が心が狭い人間じゃなかったんだって。会社の人間であつたりとか、あんだけテレビでかわいそうかわいそうって言うたら、自分のほうがおかしいんじゃないかって、ふと思うわけですよ。

たまたま Youtube でですね、桜井会長が入国管理局前で街宣したんですよ。それをたまたま見かけて、「やっぱりそういう風に思っている人っているんだな」って。Youtube とかよく見てたんですよ、結構あれ注目されてたんですかね、トップ開いたら出たんで。音楽聴いたり。暇つぶしになるんで。そんなに昔(からみていたわけ) じゃないです。見出した頃ですかね。あの圧倒的な街宣を見てですね、すごいと思って。それからしばらくは動画を見る感じで。ホームページがありますよね、入会して。カルデロン問題をたまたま動画で見たんですけど、そこからホームページにいくと在日特権を許さない市民の会ってことで、というのじゃおかしいですかね。韓国人・朝鮮人が嫌いですが・・・嘘つき(だから)。とにかく謝罪しろ、賠償しろ、ですよ。

でも、参加するっていても別に友達がいるわけでもないんですけど。地元でもやってるんだっていうのがわかって。最初に参加したのが、一昨年の5月だったと思いますね、ゴールデンウィークだったと思います。5月のゴールデンウィークの外国人参政権反対デモだったと思います。横断幕が確か外国人参政権反対って。あと年金問題ですね。地元で問題になってたのが、そのことが書かれてありました。

(運動経験は) 初めてです、まったくの。結構思い立ったらやるっていう判断で。

世の中のおかしい——おかしいぞって、こうやって活動してる人たちがいるんで、自分も合流しなければいけないなと思って。だから、まったく最初、素人で参加して何が出来るってわけでもないんですけど、頭数にはなるかなっていうんで。それまでそ

ういう、一般（市民）でこんだけの規模でっていうのがなかったと思うんですよ。まず、日章旗持ってそういう在日特権に断固反対みたいな、そういうのなかったですよ。参加しなきゃいけないなって思った。

（関心がある）問題・・・まあ、在日の年金問題ですよ、参政権の問題ですよ。あとは、何あったけ・・・結局全部つながってるのは、攻撃対象がつながってるんですよ。慰安婦賠償問題とか、朝鮮学校の無償化とか・・・実際ですね、地元でそういうのやってるんですけど、攻撃対象というか、戦っている相手は全部おんなじなんですよ、人脈が。この前あった原発反対のにしても。だから、自ずとそうになっていくんですけど。

今までベースの特権があって、さらに上乗せを狙ってるわけなんですよ。いい加減にしろよっていう。今まで自分たちが得た特権に対しても、感謝とかそういうのがなしに、さらに特権を要求するっていう。今まで黙っていたけど、既存のそういう特権だっておかしいじゃないかって。究極の目標っていうのは、在特会ですね、入管特例法の廃止ですよ。そこまで要求するんだったら、もうこっちもことん追い出すまで追い込むぞっていう、実際それができるかどうかは別問題なんですよ、そういう姿勢を見せておかないと。在日特権の具体的なものについては、在特会で学んだことが多いです。

（それまで活動していなかったのは）受け皿がなかったですものね。ネットで情報を見るにとどまってきました。在特会が早くからやってれば、一緒に参加してたっていうのは断言できるんですけど。そういう受け皿としての役割ってすごく大きいと思えますよ。

（救う会は）知らなかったんだと思います、地元でやっているというのは、歴史教科書を作る会、そのへんのも見てましたし、動きをですね。ネットとか。（しかし）一般大衆の運動ではなかったんですよ。その時でも何かやり方はあったと思うんですけど、たとえば抗議の電話をすとかですね、でもそういう発想がなかったです。だから在特会が立ち上がったから変わったこととか、結構あるんじゃないかなって。インターネットの生中継もやってますし。

（周囲に話す人は）大学の頃はちょくちょくそういう話題・・・それ（在特会に参加する）以前はなかなか

ないですね。世間話程度ですね。

（フィリピン人一家のことも受け皿がなければそのままに）多分その可能性は大いにあったと思います。せいぜい周りの人に知らせるしか。今はいろんな手段を手に入れたんで。結構在特会ってデモ、街宣派手にやって、そればかりって思われてるかもしれないんですけど、結構地道なこともやってるんですよ。本当に1人でもやれることだったら、チラシを印刷してポスティングしていく。あとは、電話かるとか葉書送るとか。結構、そういうのの割合も同じくらい大きいですよ、表に出てやる（ことと比較しても）。当時はそういう手段があるっていうのも知らなかったですし。

活動のベースになっているのは、歴史の問題そしてマスコミの違和感です。もともとはそんなにテレビなんか見ないんですよ。見なくても気になるくらいになったのが、カルデロン一家の時かなって感じですね。本当にテレビ見ませんもの。小さい頃はアニメとか見てましたけど、それこそ今は競馬中継しかみないです。（競馬は）やってますよ、ちょこちょこ。

4. 運動経験で得たもの

そういう活動を目の当たりにしたのも初めてでしたし、生で。方向性が見えてきたっていうか。「こういうことを積み上げて変えていけるかもしれないな」って。（初対面でも）まったくそういうのは・・・人見知りしない性格なのかな。今思ったら、女の子1人であまりないのかも。（女性のメンバーも）いないです。（やりにくくないですか）まったくそんなことは・・・。すぐ打ち解けますし。

新鮮さはすごいありましたね。結構人数集まってきたんですよ。日章旗を持って、横断幕を持って、マイク持って、大通りを歩いてアピールするって。（それから）ほぼ毎回（の参加）です。（繁華街は）職場からもうちょっと足を伸ばしてって感じなんで、そこまで（負担では）。（知っている人が通る可能性は）あるかもしれないですね。実際ありましたね、声かけられたことはなかったんですけど、後から動画確認したら映ってたっていうことは。

やっぱり、在特会が立ち上がってそういう活動が芽生えてきて、継続しないとイケないんで。さらに拡大しないとイケない、というのがあったんで。最

初の頃なんか、本当にただ突っ立ってるだけだったんですけど、それでもやんなきゃいけないし。それに実際現場でそうやってがんばっている人たち見たら、活動があるのに自分が特別な理由もなく参加しないっていうのも、自分の気がすまない。本当にみんなまじめなんですよ。

(関心があるテーマは) 順番つけられないかもしれないです。考えてみてもいいですか…。朝鮮学校の無償化かもしれないですね。何が何でもおかしいだろうって。朝鮮学校に公金を支出するっていうのは。どういう学校かっていうのは、調べたらすぐわかりますし。まあでも、他にも…。どれが一番っていうのはないです。生活保護の問題も大問題だし。もちろん、外国人参政権も。でもそれは、実際に実行されていませんから、現在進行中っていうことでは生活保護だったり歴史の問題だったりしますね。(歴史の問題というの) だから、やってるんですよ、水曜デモとか、そういう人たちが地元にもいるんですよ。署名活動したり、やってるんですよ。そういう人たちがいるっていうのは知ってたんですけど、地元で活発に活動しているというのは思ってたんです。

(得られたものは) 何もないです。本当はやりたくないやりたくないと思いつつながら、実はやってるんですよ。街の真ん中で街宣やってもほとんど誰も聞かないし。しんどいだけだし。時間もお金も使いますし。相手側と対峙するとか、そういうイベントの時ってむちゃくちゃストレスたまりますし。「許せん」っていう。やる必要のない世の中になつたらいいな、ということです。やらないと押される一方なんです。今、在特会を叩いたり、誹謗中傷とかありますが、それって裏を返せばそれだけ脅威となってるんじゃないかなって。極端にいうと、相手が嫌がることをどんどんやんなきゃなって。やらないでよかったらそれに越したことはないですけど、見て見ぬふりはできないですし。

(運動しない生活に戻ることは) できないです。危機感があるから…。今が勝負どころっていうか。今一歩も引いてはいけないんじゃないかって思います。領土問題にしても、在日の問題にしてもですね。やっぱり活動のエネルギーっていったら、危機感であったり、怒りであったり。自分がおかしいって思ってるから、それをごまかせないですね。思ったら

行動する派なんです。

やっぱり一定の効果は感じてるんですよ。在日特権を許さない市民の会が会員数1万人を超えて、その亜種っていったらヘンだけど、いろんな協賛団体のようなものも出てきたし。やっぱりこれが社会運動として拡大していったら、という手応えは感じてます。だから、寂しくて参加している人っているかもしれないんですけど、そういう人(の参加)でも極端に言っちゃえばなんでもいいんですよ。そういう人でも参加して、その人の参加が結果としてプラスになるのであれば、それはいいかなと思ってます。何も得られたものってないんですけど、これからです。とにかく今は動くしかないって感じです。

(仲間との関係は) それは大きいです。支部長とかお会いになりましたか?支部長にしても、他の仲間にしても、めっちゃ愛してます。本当、まっすぐなんですよ。いくらそういう政治の問題っていつても、「そういうこともあるんじゃない、いろんな人がいるから」ってそういう人がいますよね。そうじゃなくって、真剣に怒る、そして動く。いくら周りの人に話をしても、自分の目の前の生活のことしか頭がないから、「まあ、いろんな人がおるけんね」「どっちもどっちやな」みたいな、そういう感じになってしまうんですよ。(でも在特会の人)はめっちゃくちゃ真剣なんですよ。(打ち上げの時)も盛り上がります。というか、その日の活動の反省ですよ、あと情報交換。そして次の打ち合わせって感じですね。

5. 結語に代えて

M氏は、大学生時代から『正論』を購読するなど、相当に保守的なイデオロギーを持っていた。その意味で、イデオロギー的に大きく変化したから在特会に参加したわけではなく、本人も述べるように「受け皿」があればもっと早期から保守系の運動に参加していたと思われる。購読者の平均年齢が相当高いと思われる『正論』を20歳前後で読んでいた点で、M氏はかなり特異な例に入る。

だが、そうしたイデオロギーだけではなく、M氏にはかなりの積極性が見られる。彼女は、交際相手を在特会の活動に誘い、彼も活動家に仕立てて共に活動してきた。安田(2012)のルポルタージュでも描かれる在特会の活動家は、家族にも友人にも活動のことを言わず、個々ばらばらに参加するというも

のであった。そうした活動家像からしても、M氏はかなり特異な部類に入る。自らのイデオロギーを隠すわけでもなく、交際相手を活動に引き入れるだけの主導権も示す。その意味で、これまで排外主義運動について言われてきた、孤立した弱者というイメージから、ある意味でもっとも遠い存在なのかもしれない。それは、女性であるにもかかわらず参加するというジェンダー・バイアスの乗り越え要因として、どこまで一般化できるかわからない。女性の保守団体の活動家も含めた研究、あるいは男性の側からのジェンダー視点をを用いた研究が必要になるだろう。

文献

- Gidengil, E. et al., 2005, "Explaining the Gender Gap in Support for the Radical Right: The Case of Canada," *Comparative Political Studies*, Vol.38.
- Givens, T. E., 2005, *Voting Radical Right in Western Europe*, Cambridge University Press.
- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)~(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号.
- , 2012b, 「在特会の論理(8)~(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)~(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
- , 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.
- , 2012f, 「排外主義運動のミクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.
- , 2012g, 「在特会の論理(5)——『普通に生活できる時代』を取りもどしたいE氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25号.
- 安田浩一, 2012, 『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。